

姫路城城下町跡

－ 姫路城跡第300次発掘調査報告書 －

平成25年(2013年)

姫路市教育委員会

序

姫路城は本市の象徴であるとともに、我が国を代表する文化遺産の一つです。江戸時代のはじめに池田輝政によって五重六階、地下一階の連立式天守が築かれて以来、400年を経た今も威容を誇っています。姫路城下町は、天守のある姫山を中心に螺旋状に巡らされた三重の堀によって、天守をはじめ城の中核の置かれた内曲輪、武家屋敷が立ち並んだ中曲輪、町人地・寺社を中心とした外曲輪に区分されています。このうち内曲輪・中曲輪の大半が世界遺産及び国の特別史跡として登録・指定され保護・顕彰が図られております。

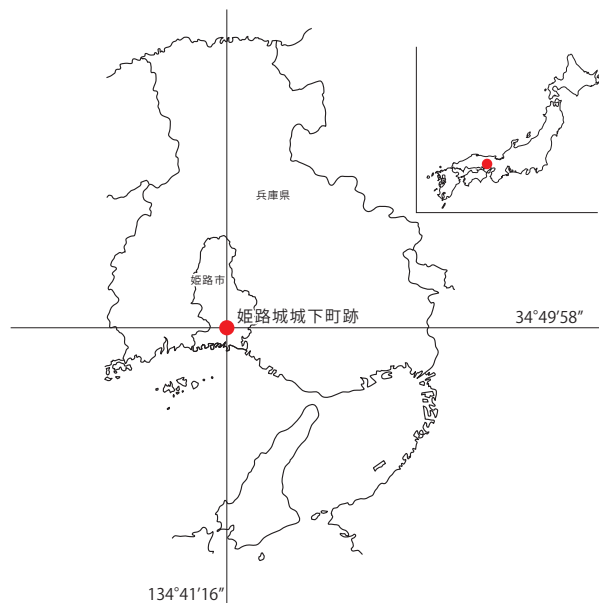
一方、町人地を中心とする外曲輪は、江戸時代以来、姫路の経済の中心地として発展し、現在も播磨の中核都市にふさわしい都心づくりが進められています。そうした一画にあたる福中町において、発掘調査を実施し、江戸時代の町屋遺構と江戸時代以前の遺構を確認することができました。ここに当該成果を報告し、姫路城跡の調査・研究の進展に資する所存であります。

最後に事業実施にあたり、多大なご協力を賜りました株式会社アカシカハウス、その他関係者各位に心から御礼申し上げます。

平成26年(2014年)3月31日

姫路市教育委員会

教育長 中杉 隆夫



例 言

1. 本書は姫路市教育委員会が株式会社アカシカハウスの委託を受け、姫路市福中町99番1・100番1において実施した姫路城城下町跡における発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査の実施ならびに本報告書の刊行に際しては、株式会社アカシカハウスに多大なるご協力を頂いた。また、現地作業では有限会社松浦興業にご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。
3. 発掘調査に係る事務は姫路市教育委員会生涯学習部文化財課が行い、現地での発掘調査及び整理作業は同埋蔵文化財センター 技術主任 中川猛・嘱託職員 玉越綾子が当たった。
4. 本書の執筆・編集は中川が行った。
5. 発掘調査で得られた出土遺物、図面、写真等はすべて姫路市埋蔵文化財センターにおいて保管している。
6. 整理作業・報告書の作成には、以下の職員が参加した。
関 梓、黒岩紀子、香山玲子、清水聖子、田中章子、寺本祐子、野村知子、藤村由紀、三輪悠代
7. 発掘調査・出土品整理および報告書作成においては、下記の方々・機関より御協力・御教示を賜った。深く感謝の意を表したい。(敬称略、五十音順)
工藤茂博、津田堅一、長谷川国雄、城南地区連合自治会、姫路市立城郭研究室、福中町自治会

凡 例

1. 近世姫路城は、文化財保護法による「特別史跡姫路城跡」と周知の埋蔵文化財包蔵地である「姫路城城下町跡」に区別されている。調査回数については、これを区別せず「姫路城跡第〇次」としている。また、江戸時代の城下町についての言及には「姫路城下町」を使用している。
2. 遺構名の表記は、溝 (SD)、井戸 (SE)、柱穴 (SP)、掘立柱建物跡 (SB)、土坑 (SK) とした。
遺構名は遺構面毎に1番から番号を付している。本報告においては煩雑を避けるため必要に応じて第1面は1-〇〇とし、第2面は2-〇〇と記載している。なお、江戸時代以前の遺構については第2面で検出したが、同様の理由から3-〇〇と記載し区別した。
3. 発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位は全て座標北である。標高は、東京湾平均海水準 (T.P.) を使用した。
4. 土層注記に用いた色調は『新版 標準土色帳』(1999年度版) に準拠している。
5. 本書で用いる分類名・土器編年および年代観は次の文献によっている。
肥前陶器・磁器：九州近世陶磁学会事務局2000、備前焼：乗岡実2000、丹波焼：長谷川真2006、土製煮炊具：岡田・長谷川2003、土師器皿：森1991、焙烙：中川2012、羽口：伊藤1992

目 次

序	
例 言・凡 例	
目 次	
第 I 章	調査に至る経緯と経過…………… 1
第 1 節	調査に至る経緯と体制…………… 1
第 2 節	調査の経過…………… 1
第 II 章	遺跡の立地と城下町跡の既往の調査…………… 3
第 1 節	遺跡の立地と環境…………… 3
第 2 節	姫路城下町における町屋の調査例…………… 4
第 III 章	調査の結果…………… 5
第 1 節	調査区の層序…………… 5
第 2 節	第 1 面の遺構と遺物…………… 6
・	敷地境・礎石・SE1～4・SK25
第 3 節	第 2 面の遺構と遺物…………… 11
・	敷地境・SK14・SK15・SE1・1-SK35・SK39・SK23・SK35・鍛冶関連遺物
第 4 節	江戸時代以前の遺構と遺物…………… 21
・	SD1・SE1・柱穴群・2-SP47
第 IV 章	総括…………… 26

第 I 章 調査に至る経緯と経過

第 1 節 調査に至る経緯と体制

姫路市福中町97番地・98番地・99番1・100番1において株式会社アカシカハウスによる集合住宅の建設工事が計画された。計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城城下町跡に所在する。

同社より文化財保護法第93条の届出がなされたことを受け、文化財保護法に基づいて協議を開始した。計画地は現状では駐車場として利用されているが、それ以前の土地利用としては、敷地の西側にあたる97番地・98番地には地下室のある中高層の建物が、東側の99番1と100番1はそれぞれ低層住宅が建っていた。そのため、敷地東側は遺構の残存する可能性が極めて高いと予想された。このことから敷地内において遺跡の残存状態を確認するために、平成25年5月8日と同月14日に確認調査を実施した。確認調査の結果、97番地の一部、99番1、100番1の一部において、遺構が確認されたことから兵庫県教育委員会へ結果を報告するとともに事業主と継続して協議を行った。協議の結果、今回の工事により遺跡が破壊される範囲は99番1と100番1に限られることとなった。兵庫県教育委員会からの発掘調査の通知に基づき対象となる範囲の全面調査を実施した。

現地調査開始から整理作業終了までの体制は、以下のとおりである。

教育委員会事務局	教 育 長	中杉隆夫	埋蔵文化財センター	館 長	秋枝 芳
	教 育 次 長	林 尚秀		係 長	森 恒裕
	生涯学習部長	小林直樹		主 事	嶋田 祐
	文化財課長	福永明彦		技術主任	中川 猛
	係 長	大谷輝彦		嘱託職員	玉越綾子
	技 術 主 任	福井 優			

第 2 節 調査の経過

調査対象面積は約273㎡である。遺構検出は2面で行った。平成25年7月9日より重機掘削を開始し、第1面より調査を行った。調査区南側（99番1）から調査を進めた。調査区が東へ広がる範囲（100番1）において比較的上層から礎石が残存していることを確認した。そのため、100番1においては礎石を確認しながら順次掘り下げを行った。整地層は確認されたもののこれらの層を掘り込む明確な遺構は少なかったことから、礎石や石室を残しながら99番1と同じ面まで掘り下げ遺構を検出した。第1面においては礎石、瓦列、水琴窟、土坑、井戸等を確認した。また、鍛冶関連遺物も出土することから鍛冶炉等の遺構の検出に注意を払って調査を行ったが確認できなかった。同月29日には第1面の調査を完了し、引き続き第2面への掘り下げを行った。井戸や土坑、溝の他、鍛冶関連遺物を含む土坑が検出された。また、江戸時代以前の井戸や溝も確認された。8月9日に記者発表を行い、同月10日に現地説明会を開催し、猛暑ながら地元の方を中心に96名の参加があった。その後、断ち割り等の調査を行い、平成25年8月21日に事業主に現場を引渡し、現地作業は完了した。引き続き、整理作業を開始し本報告書の刊行をもって事業は完了した。

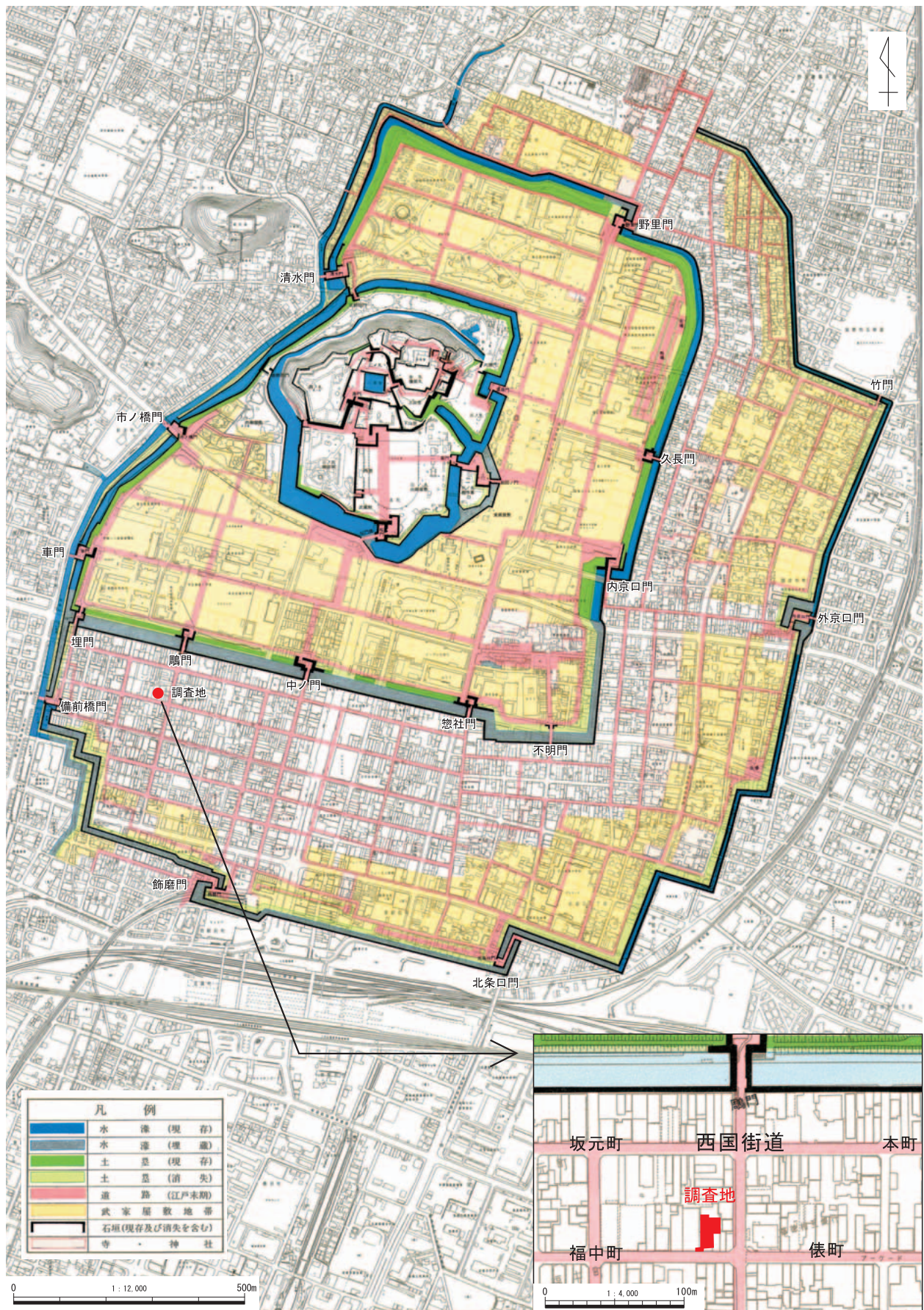


図1 調査位置図[『姫路城跡(城郭図)』(姫路市1986・2003)を一部改変・加筆]

第Ⅱ章 遺跡の立地と城下町跡の既往の調査

第1節 遺跡の立地と環境

姫路城城下町跡は、姫路市域を南北に貫く市川と夢前川によって形成された沖積平野のほぼ中央に立地する。姫路平野には古代より東西交通の要である山陽道が通り、更に姫路を基点として東へは丹波、有馬方面へ、西へは美作あるいは因幡へと街道が延びている。また、市川あるいは夢前川を通じて但馬あるいは山陰地方ともつながる。南側には瀬戸内海航路があるなど交通の要衝であった。こうした地理的要因を背景として近世姫路城は成立した。近世姫路城は池田輝政により、慶長6年から同14年までかけて平野部と独立丘陵である姫山・鷲山を利用して作られた平山城である。独立丘陵の標高は約50m、平野部は11～15mを測る。市川の支流である船場川を西限とし、姫山・鷲山を囲うように内曲輪、中曲輪、外曲輪と縄張りされている。内曲輪には天守閣群が、中曲輪には主に武家屋敷が、外曲輪には寺社地、町人地、武家屋敷等が配された。船場川西岸に広がる龍野町や材木町等、あるいは北東に位置する野里地区を除けば曲輪外への町屋や武家屋敷の広がりほとんど見られない。姫路城下町は池田氏時代の規模をほぼ維持し、江戸時代を通じて大きく変わることなく幕末を迎えている。

調査地である福中町は池田輝政による城下町建設以前に当地にあったとされる「福中村」に由来する町名として知られている。正明寺文書にある明応三年（1494年）が文献上の初出である（姫路市2011）。『播陽万宝智恵袋』所載の「惣社集日記」によれば、大永元年（1521年）には播磨国総社の5月の神事に目代福中氏と福中村村民100人が参加したことが記されている。また、天文二年（1533年）には宿村、国府寺村とともに播磨国総社の三ツ山神事の装山を製作している。このように播磨国総社と関わりが深い村の一つであったことが知られるが、村の厳密な場所は知られていない。英賀神社所蔵の「宿村絵図」によれば、江戸時代には豎町以西をかつての福中村と認識していたことが知られている（小栗栖2013）。また、『播陽万宝智恵袋』所載の「播磨国衙巡行考証」には元龜年間頃には上福中村と下福中村があったとされ、池田輝政の町割により城下の一面に取り入れられ町場化した前者を「福中町」と称し、後者を「福中村」（現福沢町）と称したと記されている。

福中町は外曲輪の西に位置し、外曲輪と城外をつなぐ備前門に通ずる二階町通に所在する。元文五年（1740年）の『姫路町飾磨津町地子銀控』には家数61、地子銀643匁とある。福中町には間口や居住者を記した町絵図等は残っていないが、現状と残存する西二階町や本町の町絵図とを参照すれば、裏行きは約18間で間口は3～5間の南北に長い町屋が並んでいたことがわかる。福中町に隣接して西に俵町、東に福中内新町、南側に西魚町、北側に坂元町がある。北側の坂元町を通る道路が近世の西国街道であるが、『姫路府志』には寛永年間（1624～1644年）にこの西国街道が南側の福中町を通る二階町通へと往来が変更されたと記される。いずれにせよ福中町周辺は城の内外をつなぐ備前門に近いことから城内でも殷賑な場所であったのであろう。こうした点を反映して福中町には旅籠が多数営まれ、「旅籠町」とも呼ばれていた。享保十八年（1733年）の『姫路町書上帳』によれば旅籠屋20軒、『播州姫路考略記』によれば宝暦五年（1755年）の姫路の旅籠屋27軒中、17軒が福中町にあったことが記されている。

第2節 姫路城下町における町屋の調査例

姫路城下町は、先の大戦によって大部分が焼失したため、江戸時代から続く町屋遺構は多くはない。戦火を免れた龍野町をはじめとする船場地区や生野街道沿いの野里地区に一部残存している。考古学的な発掘調査では町屋の一部が対象となることが多く、全体像が明らかとなる調査は少ない。その中において元塩町で実施した第260次調査は、1軒の町屋をほぼ全面調査した例として貴重である。ここに概略を紹介し、姫路城下における考古学的に判明する町屋の在り様を呈示しておきたい。

町屋は西国街道に南面し、北側は中堀に接している。現道から約3mと隣地との境界約2m分を除き、町屋の表から奥までを全て調査した。間口の詳細は不明であるが、現状と旧地番地図等の検討から5間以上と推測される。江戸時代の街道の位置はほぼ現道と重なるが、戦後に区画整理が行われたことと当該部分の発掘調査を行っていないため、厳密ではないが裏行きは概ね22間と想定される。

調査では現道に近い範囲から礎石が確認された。少なくとも3回の建て替えが確認でき、最下層の礎石は旧耕土上面で検出した。街道に面した建物（ミセ）が想定できる。また、土間や埋甕群、竈等も検出している。建物の北側で4基の井戸を検出した。時期は17世紀代から近代まででこの範囲は江戸時代を通じて井戸のある空間であった。その奥には各時期に掘られた土坑が存在する。土坑の大半は廃棄土坑である。また、土坑上面には礎石も散見されることから、時代が下るにつれ奥に何らかの建物が建てられた可能性がある。土坑内からは手水鉢等も出土していることから、奥は基本的には廃棄空間、時代が下るにつれ建物や庭等の様々な空間に利用されている。

これまでの調査成果を踏まえると姫路城下町の町屋については、基本的にこの第260次調査で検出した遺構配置で理解できる。また、このパターンは現存する町屋の構造とも大きく矛盾していない。

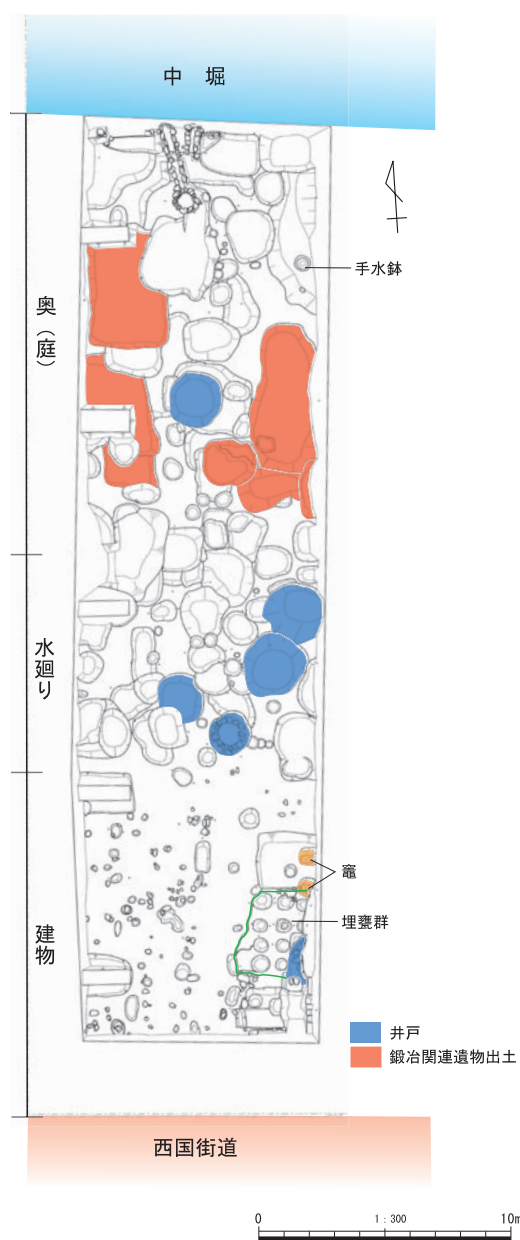


図2 姫路城跡第260次調査平面図

第Ⅲ章 調査の結果

第1節 調査区の層序

層序は表土、造成土（現代～近代）、整地層（近代～江戸時代）、旧耕土（城下町建設以前）を経て地山へ至る。整地層は南壁において5層確認した。各層厚は約10cmを測る。東壁の整地層のうち3～6層は層厚5～10cmを測り、下層にあたる7・9・10層については10～30cmを測る。北壁においても東壁と同様に10～30cmの厚さの整地層が観察できる。地山は東側の一部を除き砂礫層である。地山の高さは南端で11.7mを測り、調査区が東側へ拡張する附近から下がり、北端で11.3mとなる。東壁と北壁で確認できる層厚のある整地層については、こうした地山の高さを調整する機能を想定できる。

調査区の大部分は近現代の掘り込みによる攪乱を受けていた。そのため攪乱の影響が少ない敷地南側の旧耕土上面レベルを第1面として遺構を検出した。また、第2面についても同様に南側の地山面のレベルで遺構を検出し、北側については遺構、整地層を掘り下げ最終的に地山面に至った。



写真1 南壁断面(北から)

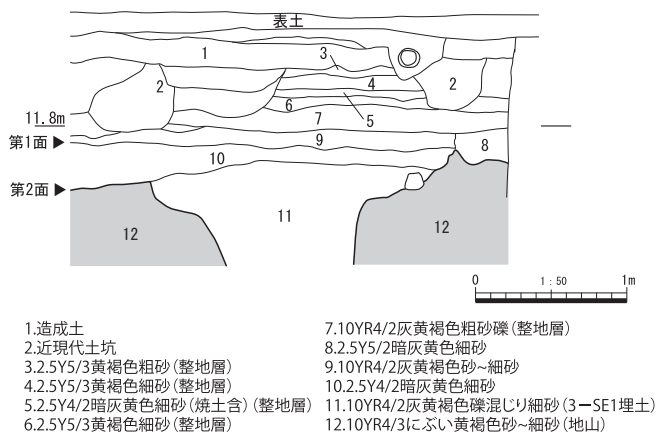
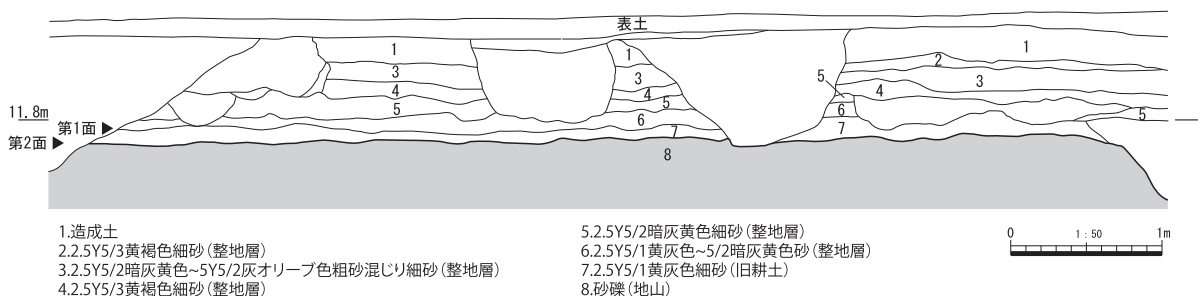


図3 調査区土層断面図 (上)南壁、(下)東壁



写真2 東壁断面(西から)

第2節 第1面の遺構と遺物

第1面は層序から旧耕土上面にあたり、17世紀代から近代までの遺構を検出したが、ここでは主に江戸時代後半の主要な遺構について報告する。

敷地境 調査前の敷地境にほぼ合致する位置において石組み遺構を検出した。大半が削平され残存部分はわずかである。長辺約50cm、短辺約25cmの板状の割石が4石、割石の東側に約25cm四方の石材8石が据えられていた。石材が東側に面を有している点と検出した位置から、町屋の境と考える。また、調査区東壁においても厚さ20～40cmを測る大振りな石材を検出した。調査区外に延びるため平面構造・規模を把握できていないが、礎石と考えるには大きすぎる点と検出した位置から、石組み遺構と同様に敷地境と考える。このことから本調査区は2軒の町屋にまたがるものと想定でき、便宜上石組み遺構を境にして西側を町屋1、東側を町屋2と呼称する。

礎石 町屋2において、敷地の奥に想定される場所から礎石を検出した。図6に示した礎石天端のレベルから、ほぼ同じ場所において少なくとも5回の建て替えを確認できる。礎石天端のレベル差は概ね20cm間隔である。Ⅳ期礎石の時期は、下部に位置するSK42から端反碗や東山焼、焙烙H類等が出土していることから、それ以後の時期である幕末～近代と想定される。また、調査区北端で検出した長辺1.2m、短辺70cm、深さ70cmを測る石室はⅣ期礎石の下部にあたる。Ⅴ期礎石はⅣ期よりもレベルが高いことから近代の所産、Ⅲ期礎石はSK41に切られている点とⅡ期礎石を被覆する整地層の出土遺物から19世紀前半に、Ⅰ・Ⅱ期礎石はそれ以前に位置付けられる。瓦列は検出レベルからⅢ期に伴うものと推測される。瓦にはコビキAとBが認められる。

町屋1においては、敷地南側においてわずかに残存する礎石を検出した。礎石の天端は概ね11.8mを測り、町屋2のⅡ期礎石とほぼ同じレベルであるが、旧耕土上面で検出した礎石についてはⅠ期礎石と同じ時期か、Ⅰ期礎石の下位に整地層があることから更に遡る可能性もある。

SE1～4 SE1とSE2は掘方のみで井側構造は不明である。SE1は直径約2.5m、SE2は直径約2mを測り、深さは2基とも2.5m以上を測る。SE1は遺物が出土していないため時期不明。SE2の廃絶は18世紀後半から19世紀前半であろう。SE3とSE4は町屋1と2における近現代の井戸である。

SK25 丹波焼の甕を逆置し、底部には径5cmの焼成後の穿孔がある。土坑内は玉石で充填され、遺物は全く出土しなかった。上部構造は削平されており不明であるが、水琴窟であろう。



写真3 第1面全景(北から)

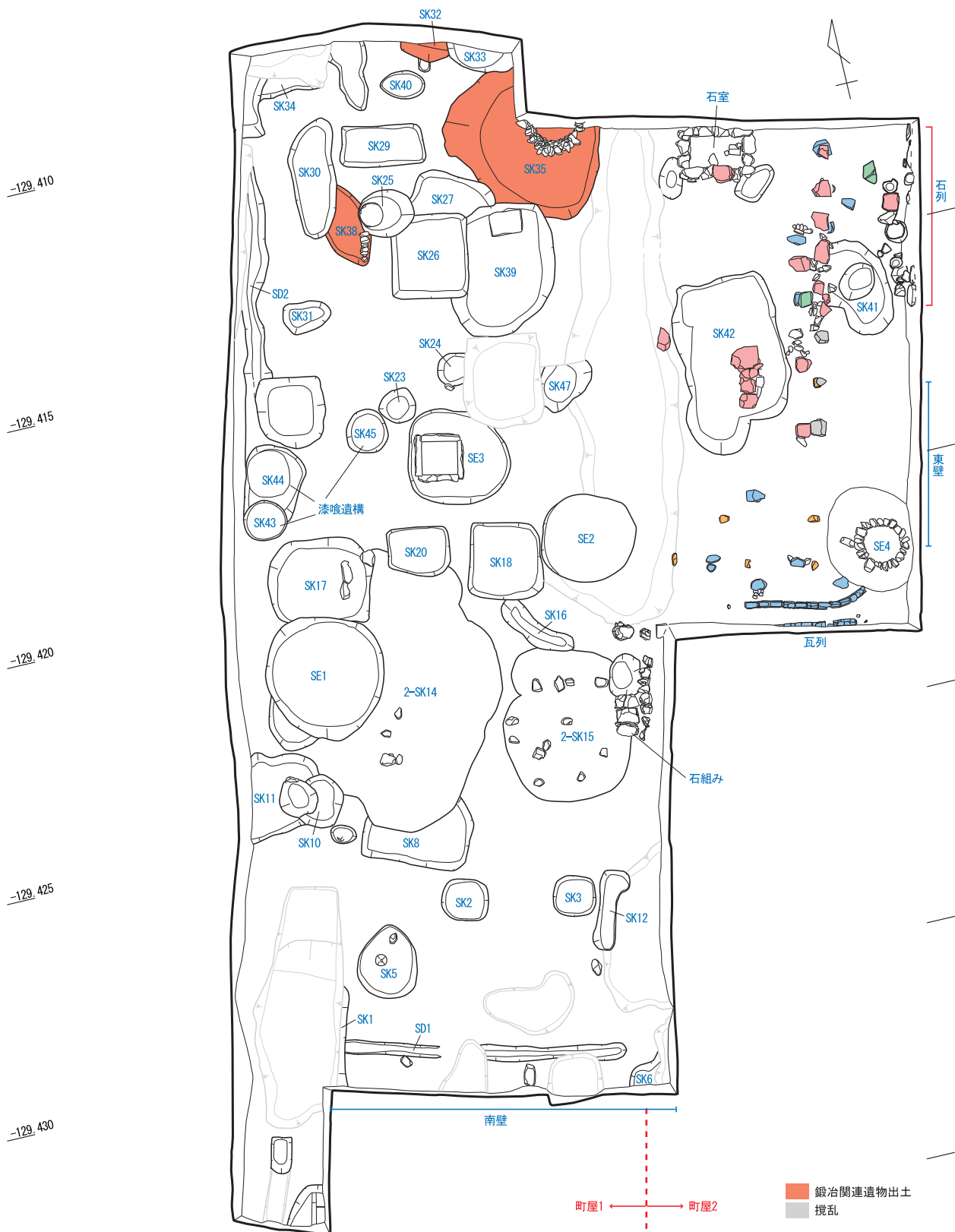


図4 第1面遺構平面図



写真4 石組み(東から)



写真5 調査区東端石列(西から)

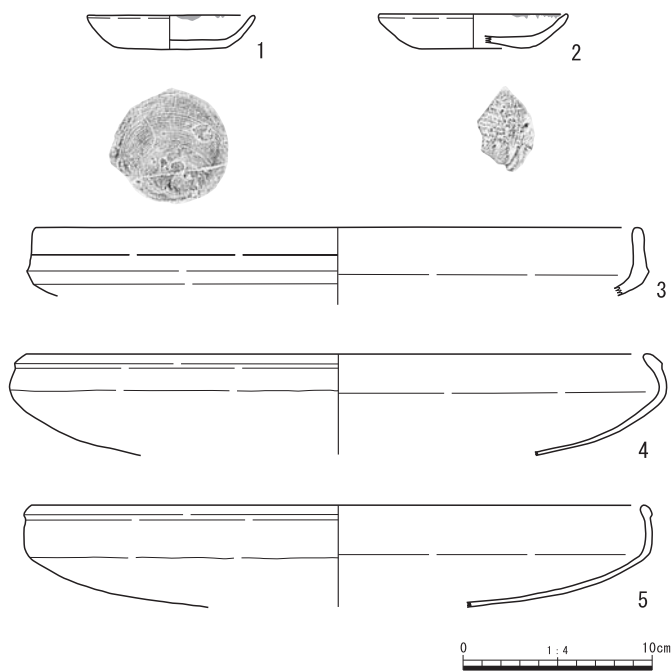


図5 SK42出土土師器



写真7 SK42出土土器

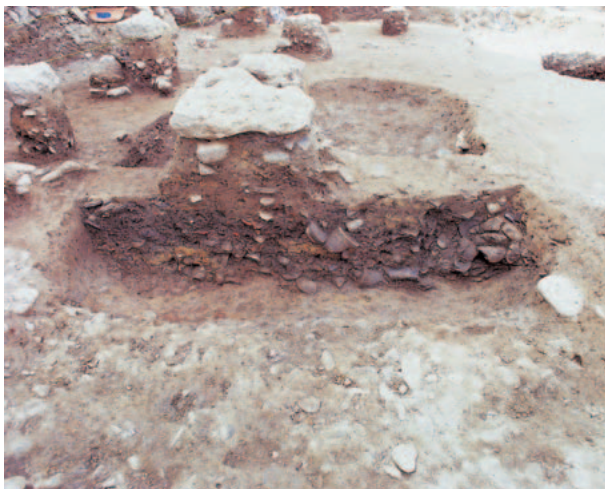


写真6 SK42断面(北から)



写真8 SK42出土瓦・豊島石製品

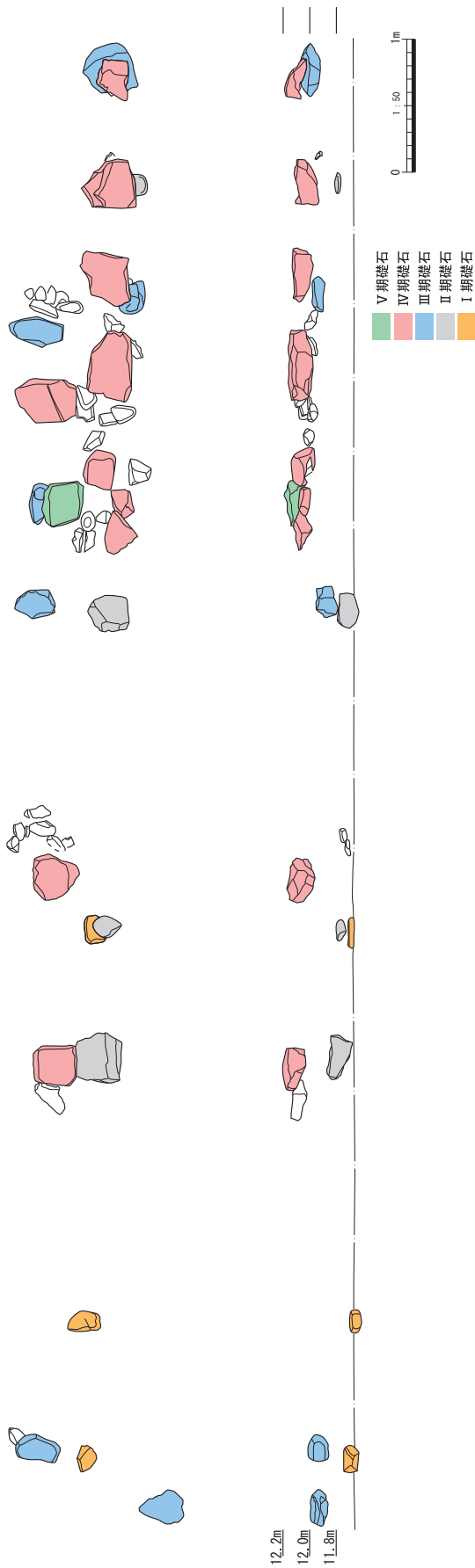


図6 礎石平・立面図



写真9 町屋2 礎石群(南から)



写真10 重なる礎石(北東から)



写真11 瓦列(北西から)



写真12 SK41出土遺物



写真15 手前SE02、奥SE03(南東から)



写真16 SE02出土遺物



写真13 II期礎石被覆土出土遺物

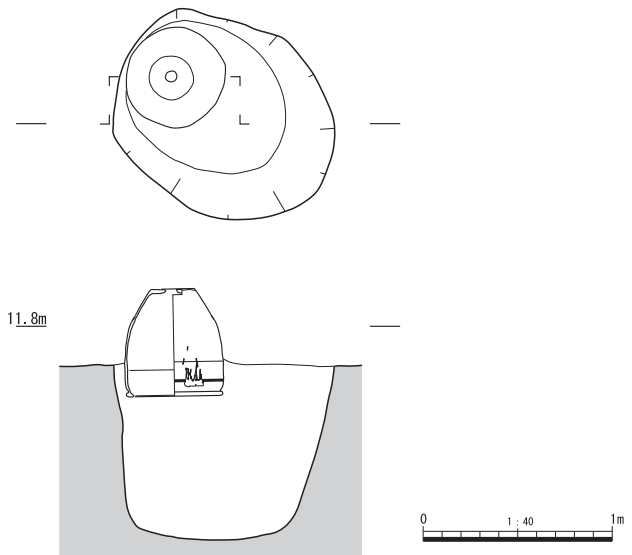


図7 SK25復元平・断面図



写真14 瓦列(手前コビキB、奥2つコビキA)



写真17 SK25断面(南から)

第3節 第2面の遺構と遺物

第2面は一部上層から掘られた遺構も残存するが、江戸時代以前と17世紀代の遺構が中心となる。江戸時代以前の遺構については後述するため、ここでは第2面=17世紀代として報告する。

敷地境 調査区の西端と東端においてSD1とSD2を検出した。いずれも素掘りで時期は不明であるが、SD1は幅30cm、深さ約5cm、SD2の幅は不明であるが深さは10cm以上を測る。SD2の埋没後にほぼ同位置においてピットが掘られている。これらの遺構は検出した位置から敷地境の遺構である可能性を有する。町屋1と2の境においては明確な遺構は検出されなかったが、第1面目で検出した敷地境の延長上に遺構が少ないことから敷地境は継承されている可能性がある。そのため、第2面においても第1面とほぼ同じ位置で町屋1と町屋2を区分する。また、後述する鍛冶関連遺構・遺物は町屋1からのみ確認でき、町屋2において全く確認できない点もこのことを傍証する。町屋1と2のいずれにおいても調査区北側には土坑群が確認されるなど敷地内の空間利用に共通性がうかがえる。

SK14 調査区のほぼ中央やや南寄りで検出した。平面プランの一部は第1面で検出したが、最終的なプランの確定は第2面において行った。歪な円形を呈し南北約6m、東西約5m、深さは遺構検出面から最大で1.4mを測る。1-SK8を切り、1-SE1により切られている。土坑は南側から緩やかに傾斜しながら底面に至り、北側で段を有し急激に立ち上がる。埋土は大きく3つに分層できる。上層は1～3層、中層は4～8層、下層は9層以下となる。中層の大半は灰が占め極めて特徴的である。灰を含まない7層が間層にあることから8層廃棄後、一定の期間を開けて6層と4層が廃棄されたのであろう。また、隣接するSK15においても同様の灰層の堆積が部分的に確認されている。土坑底面に添う11層中から備前焼の甕とともに、肥前陶器、備前焼壺等が出土した。これらを除けば遺物の出土状態に明確なまとまりは認められない。遺物は基本的に4層以下から出土した。これらの遺物は灰層にパックされていることから一定程度の時間差を有すものの一括性が高いと判断できる。

遺物の組成は土師器皿、焙烙、青花、肥前陶器、瀬戸美濃焼、備前焼、瓦質土器、軒瓦等である。肥前陶器のうち目跡が確認できるものは全て胎土目で砂目はない。絵唐津を含む皿類が多く、碗類は非常に少ない。また1点のみではあるが、白色の精良な胎土を用いた碗も出土している。軒丸瓦は三巴文の他、姫路藩主池田氏の揚羽蝶文が出土した。

図9の6～12は手づくね成形の土師器皿Ⅰ類、14～17は底



写真18 第2面全景(北から)

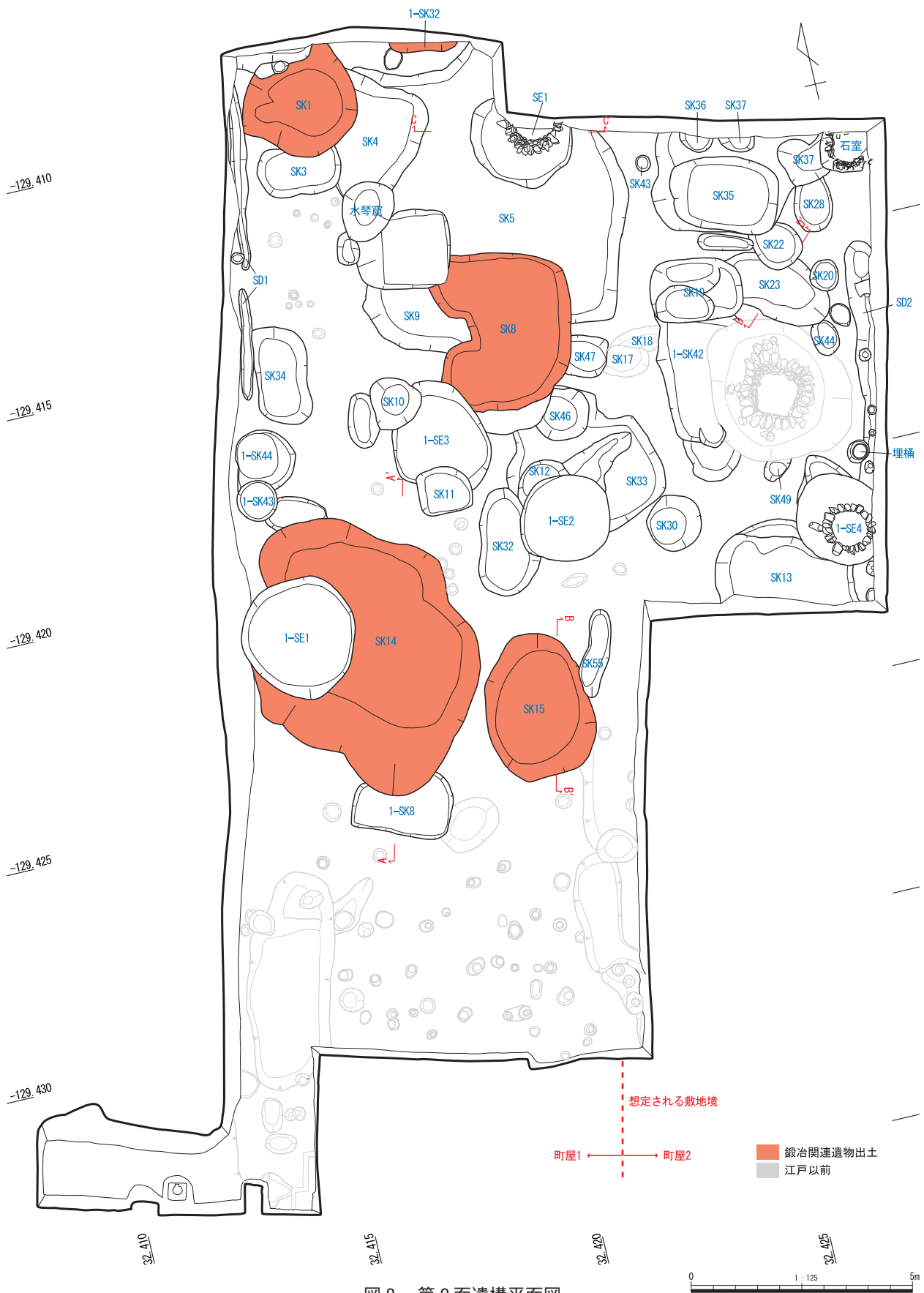


図8 第2面遺構平面図

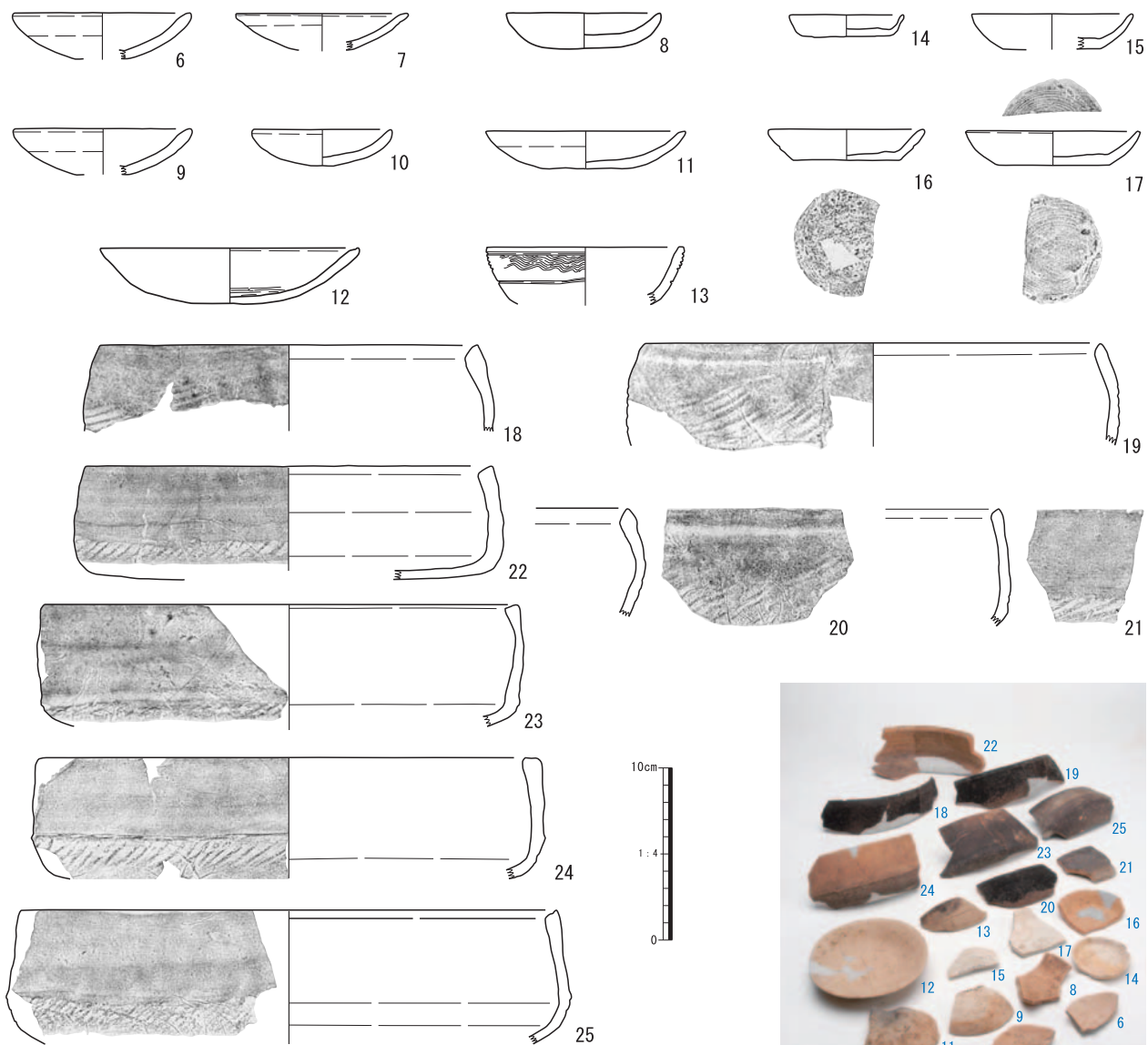


图9 SK14出土土師器



写真19 SK14出土土師器



写真20 SK14出土陶磁器



写真21 SK14出土瓦質土器・備前焼等



写真22 SK14出土動物遺存体

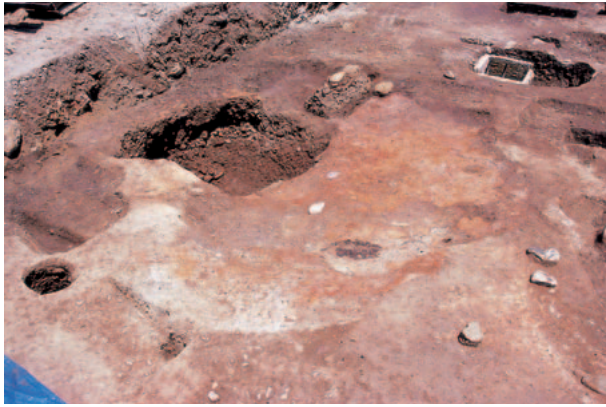


写真23 SK14 1～4層掘り下げ後全景(南から)

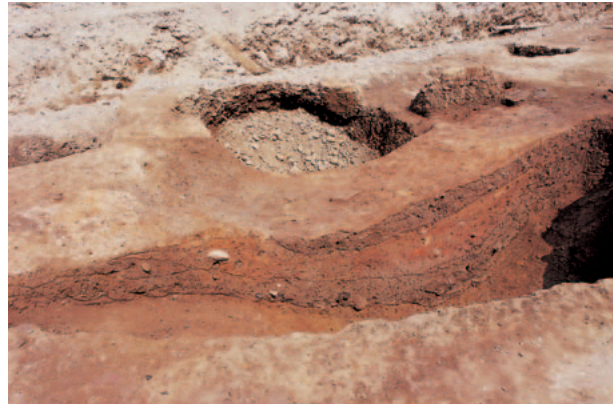


写真24 SK14南北方向断面(東から)

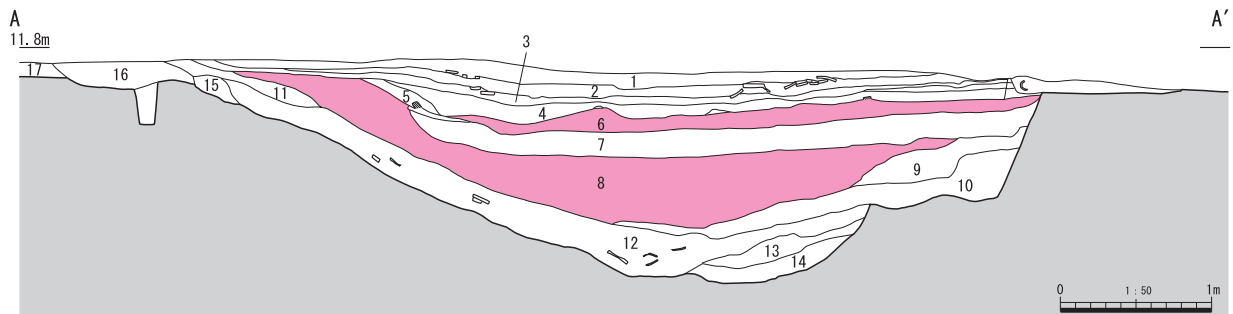


図10 SK14断面図

- 1.10YR4/2暗灰黄色粗砂混じり細砂
- 2.10YR4/2暗灰黄色細砂
- 3.5Y5/2灰オリーブ色細砂
- 4.10YR4/2灰黄褐色灰混じり粗砂
- 5.10YR4/2灰黄褐色粗砂
- 6.7.5YR5/3にぶい褐色砂混じり灰
- 7.2.5Y4/1黄灰色粗砂
- 8.7.5YR5/2~4/2灰褐色砂混じり灰
- 9.2.5Y4/1黄灰色粗砂礫
- 10.2.5Y4/2暗灰黄色粗砂
- 11.2.5Y4/1黄灰色~4/2暗灰黄色細砂
- 12.2.5Y4/2暗灰黄色細砂(貝含)
- 13.2.5Y4/2暗灰黄色粗砂礫
- 14.2.5Y4/2暗灰黄色粗砂
- 15.2.5Y4/2暗灰黄色粗砂
- 16.2.5Y5/2暗灰黄色砂~粗砂(1-SK8)
- 17.2.5Y5/1黄灰色細砂(旧耕土)

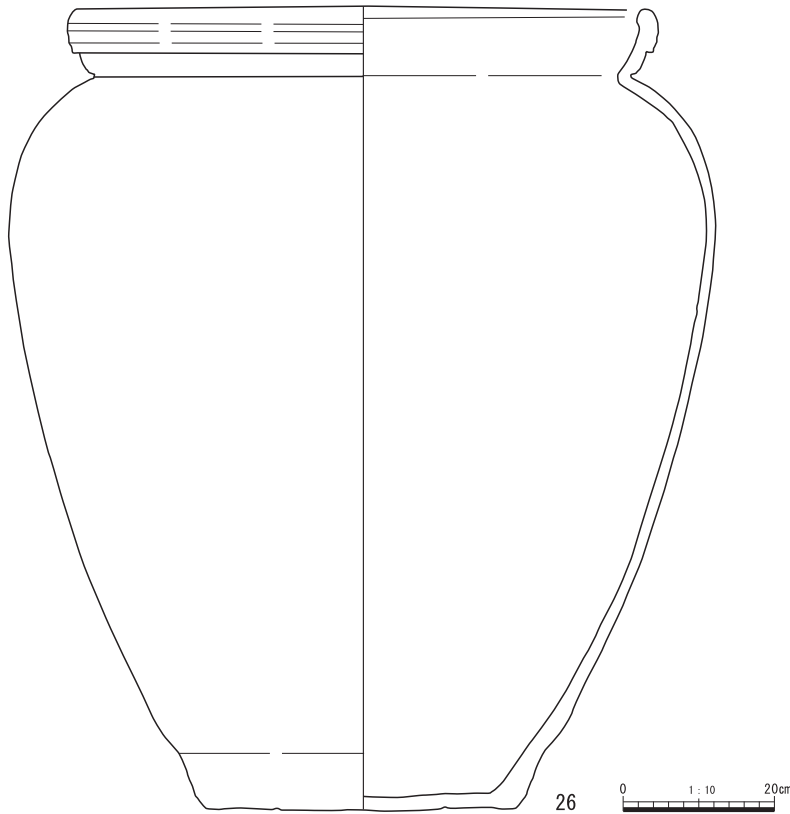


図11 SK14出土備前焼甕



写真25 備前焼甕出土状況(北から)



写真26 SK15南北断面(西から)

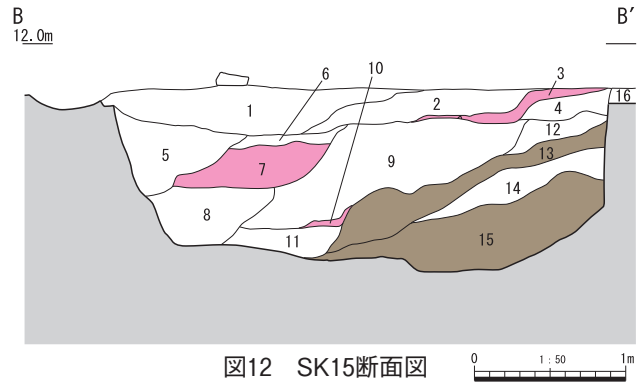


図12 SK15断面図

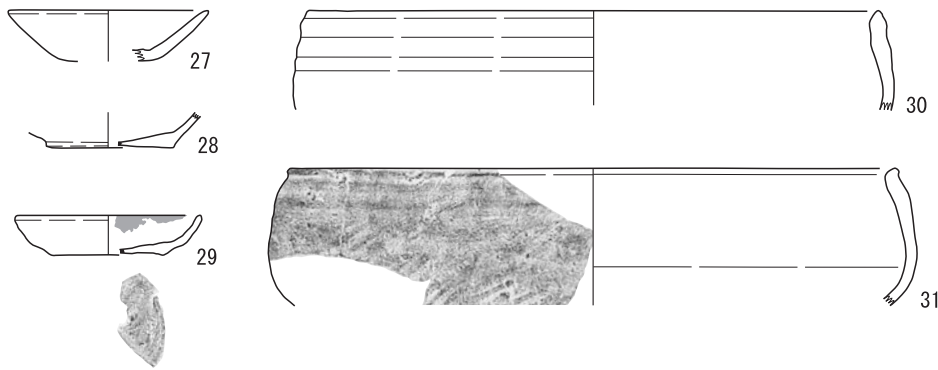
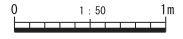


図13 SK15出土土師器

- 1.5Y4/2灰オリーブ色細砂
- 2.2.5Y4/2暗灰黄色粗砂(礫含)
- 3.7.5YR6/2灰褐色砂混じり灰
- 4.10YR4/2灰黄褐色粗砂礫(炭化物含)
- 5.10YR4/2灰黄褐色粗砂礫
- 6.5Y4/1灰色粗砂
- 7.7.5YR5/3にぶい褐色灰
- 8.10YR4/3にぶい黄褐色粗砂
- 9.5Y4/1灰色粗砂
- 10.7.5YR5/2灰褐色砂混じり灰
- 11.2.5Y4/1黄灰色礫混じり細砂
- 12.10YR5/2灰黄褐色粗砂礫
- 13.鉄滓・炭化物
- 14.10YR5/3にぶい黄褐色粗砂
- 15.鉄滓・炭化物
- 16.2.5Y5/1黄灰色細砂(旧耕土)



写真27 SK15出土遺物



写真28 SK15出土鍛冶関連遺物

部糸切りの土師器皿Ⅱ類である。13の外表面には櫛状工具による波状文が施文されている。18～20は外表面に右上がりの平行タタキを施す焙烙A 2類、21～25は平行タタキを施すも胴部の立ち上がり付近でナデにより画される焙烙A 3類に分類できる。図11の26は土坑底面より出土した備前焼甕である。最大径を肩部に持ち、そのプロポーションから天正年間の銘を持つ資料と類似する(備前焼紀年銘1998)。備前焼は壺、徳利、播鉢が出土し、播鉢はナナメ方向のスリメを持つ近世1期の所産。石製品では砥石1点のほか、復元すると半円形になると考えられる段を有する石製品が出土している。獣骨、魚骨、貝類等の動物遺存体の出土も目立つ。大量の灰が含まれているにも関わらず、鍛冶に関連する鉄滓、羽口は全く出土していない。

SK15 SK14に隣接して検出した。両者に切り合いは認められない。平面形は南北に長い円形を呈し、最大で3.3m、深さは遺構検出面から最大で1.2mを測る。土坑は角度を持って掘り込まれ、埋土は大きく下層の9～15層、中層の5～8層、上層の1～4層の3つに区分できる。下層の9～15層は鉄滓を大量に含んでいる。鍛冶関連遺物以外の出土は多くはない。また、土坑上面には第1面で確認した礎石と石組み遺構があることから、これらの遺構の時期はSK15埋没後と判断できる。

遺物は鍛冶関連遺物を除けば土師器皿、青花、肥前陶器、備前焼播鉢、産地不明播鉢、動物遺存体等である。図13の27は土師器皿Ⅰ類、28・29は土師器皿Ⅱ類である。30・31は焙烙。31はA 2類である。備前焼播鉢はナナメ方向のスリメを持つ近世1期の所産、産地不明の播鉢は、端部を折り返して成形したもので、姫路城下町における当該期の遺構から一定量出土する。動物骨には切断痕が残るものが出土している。また、SK14と接合する遺物が出土していることからSK15はSK14と同時期の遺構と判断できる。

SE1 石組みのみ第1面で認識したが、掘方は不明で第2面において検出した。調査区外に延びるため全容は不明であるが、掘方は約2mを測り、掘方内の東寄りに石組みが構築されている。円礫を使用した石組みは径1m、深さは1.1mを測る。現状では井戸と判断しているが、他の井戸と比べても掘り込みは浅い。石組み内からは初期伊万里、備前焼等が出土した。上層にあたる7・8層には鉄滓、羽口が含まれていたが9層からは出土していないことから1-SK35の混じりと判断した。掘方からは青花、備前焼等が出土した。

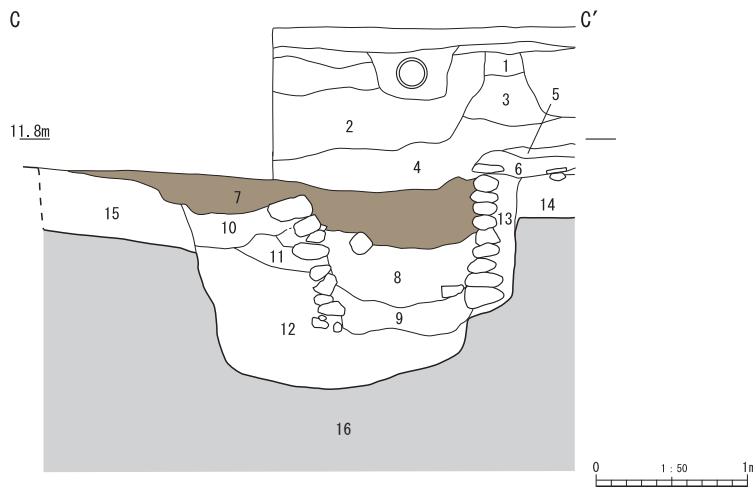
1-SK35 本来の検出面は第1面であるが、2-SE1との関連からここで報告する。検出段階では2-SE1の掘方である可能性を考えたが、下部へ続かないことから別の遺構と判断した。平面規模は調査区外へ延びるため不明であるが、最大幅で3.5mを測る。土坑の底面は一定ではなく凹凸がある。その凹凸は鉄滓のほぼ単一層で埋まっていた。深さは最大で40cmを測る。また、2-SE1の石組みは一部破壊されていたもののほぼ残存しており、1-SK35の掘り込み時にはこの石組みの存在が意識されていた可能性が高い。遺物は土師器皿Ⅱ類、砂目の肥前陶器、肥前磁器、丹波焼鉢、丹波焼播鉢ⅠB類、碁石等である。

SK39 SK8の下層で検出した。平面形は円形、直径は最大で3m、深さは遺構検出面から1.65mを測り、断面形はすり鉢状を呈する。埋土は大きく上層の細砂と下層の粗砂礫層の2つに分類できる。遺物は上・下層とも出土しているが、上層からの出土が多い。ただし、両者には明確な時期差は認めら

れない。遺物組成は土師器を含まず、肥前磁器、肥前陶器溝縁皿、備前焼播鉢、産地不明播鉢である。肥前磁器には見込みに「寿」字を散らしたもの、外面に「福」字文を描いたものがある。産地不明播鉢はSK15から出土したものと同一である。

SK23 3-SE1を切り、西側はSK19によって切られる。長円形を呈し、最大長2.7m、深さは遺構検出面から55cmを測る。上層の1・2層と下層の3～5層で堆積状況に差が見られるが、出土遺物には顕著な時期差は認められない。土師器皿I類、瀬戸美濃焼、肥前陶器、焼塩壺、軒平瓦等が出土した。

SK35 調査区北端で検出した。平面形は隅丸長方形を呈す。長辺2.5m、短辺1.6m、深さは遺構検出面より最大で50cmを測る。断面形は台形状を呈する。遺物の出土状況に明確なまとまりは認められない。図16の32・33は土師器皿I類、34・35は焙烙A2類、36はA3類である。瀬戸美濃焼天目碗・小壺、肥前陶器碗・皿、肥前磁器碗、備前焼播鉢近世I期、鬼瓦等が出土した。



- | | | |
|---------------------------|-----------------------|--------|
| 1.造成土 | 10.2.5Y4/1黄灰色細砂 |] (掘方) |
| 2.近現代土坑 | 11.2.5Y4/1黄灰色砂~細砂 | |
| 3.5Y4/1黄灰色砂~細砂(整地層) | 12.2.5Y4/1黄灰色砂~粗砂(礫含) | |
| 4.2.5Y5/3~5/4黄褐色砂~細砂(整地層) | 13.2.5Y4/1黄灰色粗砂礫 | |
| 5.2.5Y4/1黄灰色細砂 | 14.2.5Y4/1暗灰黄色細砂(整地層) | |
| 6.2.5Y4/1黄灰色砂(焼土含) | 15.2.5Y4/1黄灰色細砂(整地層) | |
| 7.鉄滓(1-SK35) | 16.砂礫(地山) | |
| 8.5Y4/1灰色粗砂(鉄滓含) | | |
| 9.2.5Y4/1黄灰色細砂 | | |

図14 1-SK35-2-SE1断面図



写真29 1-SK35-2-SE1全景(西から)



写真30 2-SE1断面



写真31 1-SK35出土遺物



写真32 1-SK35出土鍛冶関連遺物



写真33 2-SE1(左)掘方(右)井側内



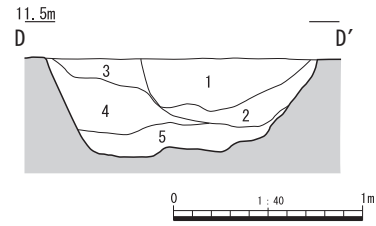
写真34 SK39出土遺物



写真35 SK39断面(東から)



写真37 SK21出土遺物



- 1.2.5Y5/2暗灰黄色粗砂
- 2.2.5Y5/1黄灰色細砂(下に炭化物含)
- 3.2.5Y5/1黄灰色砂~細砂
- 4.2.5Y5/1黄灰色粗砂(炭化物含)
- 5.10YR5/4にぶい黄褐色細砂

図15 SK23断面図



写真36 SK23出土遺物

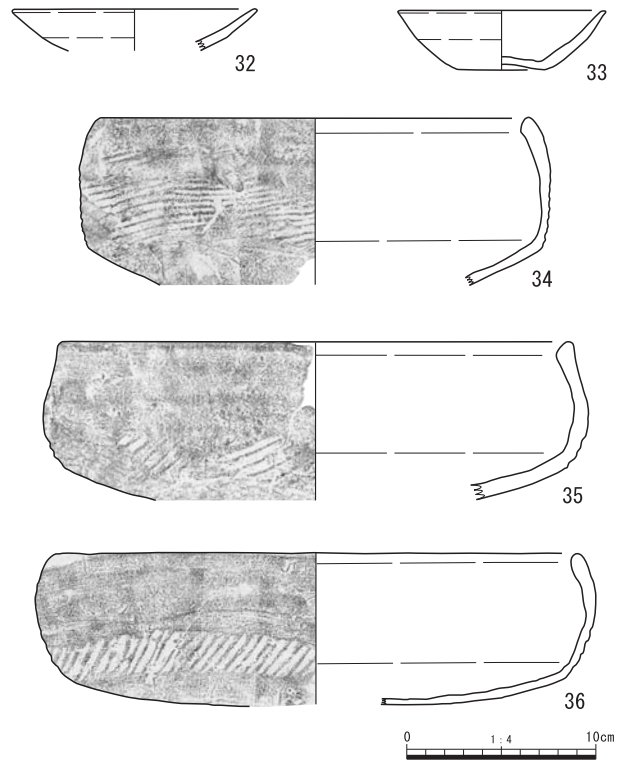


図16 SK21出土土師器

鍛冶関連遺物 鍛冶関連遺物は大量に出土したが、その出土は町屋1に限られる。第1面の鍛冶関連遺物を含む遺構も含めて、ここで報告する。

2-SK15からは概算で約170kgの鉄滓が出土した。塊状のものが多く、最大で直径20cmを測る。色調は茶褐色を呈する。木炭片、鍛造剥片、粒状滓を噛みこみ、表面はギザギザしたものが目立つ。椀形滓も少量出土している。羽口は18点出土した。いずれも断面の形状は隅丸方形を呈し、外形は9.5cm、孔径は3～3.5cmを測る。孔形は平行を基本とするが、38のみ基部側が拡張している。砥石は14点出土した。全て荒砥である。断面形は多面体を呈している。

2-SK1は調査区北西隅で検出した。平面規模は東西2.5m、南北2.5m以上を測る。埋土はほぼ鉄滓の単一層である。鉄滓の出土量は概算で約250kgを測る。塊状のものはほとんど見られない。椀形滓と炉壁が付着したものが大半を占める。椀形滓は直径12cm前後と17cm前後のサイズに集中する。篩選別によって鍛造剥片、粒状滓が出土した。羽口は18点出土した。43・44の断面の形状は隅丸方形を呈し、外形は8～9.5cmを測る。孔形は基部へ向かって開き、先端部径2.5cm、基部の残存する部分で径3.5～4cmを測る。

2-SK8はSK39の上位に位置する。平面形はコの字を呈し、最大長で3.5m、深さは26cmを測る。埋土から鉄滓と羽口が出土した。鉄滓の出土量は概算で約13kg。塊状と椀状のものが出土している。羽口は19点出土した。断面形から2種類に分類できる。45・46は円形を呈し、外形は7～8cm、孔形は基部へ向かって開き、先端部径3～3.5cm、基部側で4～4.5cmを測る。47・48は隅丸方形を呈し、外形は約7.5cm、孔径は3cm、孔形は平行する。このタイプのみ先端部の溶融は少ない。

1-SK35から出土した鉄滓は概算で約120kgを測る。色調は茶褐色を呈し、塊状のもののみ出土した。直径約20cmのものが最大である。木炭片、鍛造剥片、粒状滓を噛みこみ表面はギザギザしている。羽口は43点出土し、断面形から2種類に分類できる。39・40は隅丸方形を呈し、外形は約7.5cm、孔径2.6～3.3cmを測り、孔形はわずかに基部が広がる。41・42は円形を呈し、外形は約9cm、孔径は2.9～3.4cmを測る。孔形は平行である。砥石は4点出土し、いずれも荒砥である。

1-SK32は調査区の北端で検出した。調査区外へ延びるため全容は不明であるが、埋土はほぼ鉄滓の単一層である。鉄滓は概算で約10kg出土した。塊状で直径10cmのものが最大である。木炭とともに鍛造剥片、粒状滓を噛みこんでいる。色調は黒褐色を呈し、他の遺構の鉄滓とは色調が異なっている。炉壁とガラス質に溶融した滓の出土も認められる。羽口は2点出土した。破片のため大きさは不明であるが、孔形は基部へ向かって開く。

1-SK38は深さ約12cmと浅い。埋土に混じって鉄滓が出土した。鉄滓は概算で約17kg出土した。塊状を呈し、小礫の付着が著しいものが大半である。羽口は出土していない。



写真38 2-SK1断面(南から)

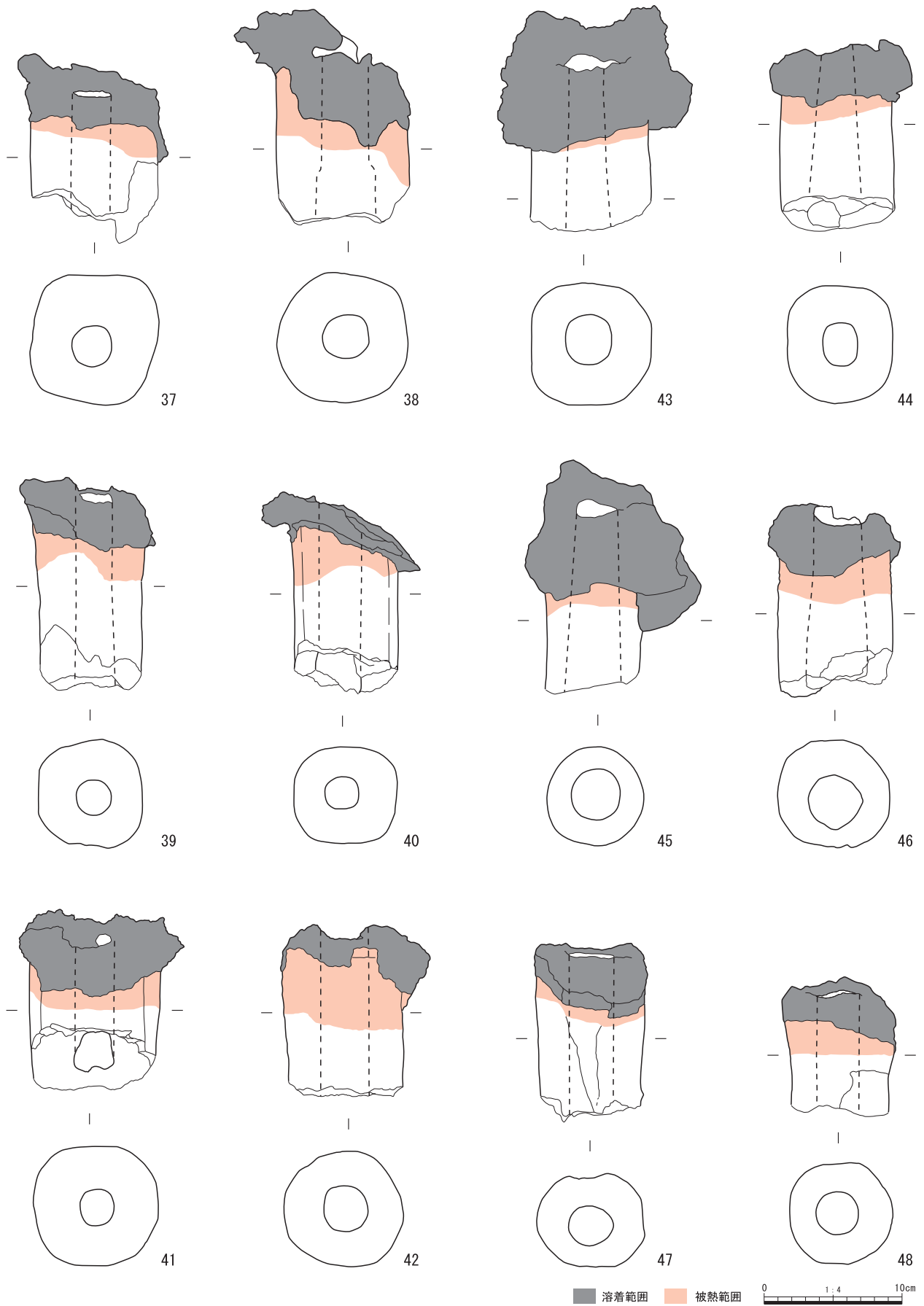


图17 羽口実測図(37・38:2-SK15、39~42:1-SK35、43・44:2-SK1、45~48:2-SK8)

第4節 江戸時代以前の遺構と遺物

第2面において検出した遺構のうち、遺物から江戸時代以前に位置づけられる遺構をここで報告する。なお、SK14以北のピットについては、本来の掘り込み面が不明であるとともに遺物の出土もほとんどないことから、厳密な時期はおさえられない。しかし、旧耕土下で検出したピットと埋土が類似する点と一部のピットから江戸時代以前の遺物が出土している点から、当該時期の遺構と判断した。

SD1 調査区北部で検出された溝状遺構である。溝の東端は江戸時代の遺構に切られ判然としない。また本来の幅等も不明であるが、検出規模で東西延長9.8m、幅は西端で約1m、東側で約2mを測る。深さは遺構検出面からSD1-1は約10cm、SD1-2は最大で約50cmを測る。SD1-1とSD1-2で様相が異なることから、SD1-2については新たに掘り直された可能性もあるが、遺物の出土状況・様相からは両者に顕著な違いは認められない。遺物は特にまとまりを持たず、散漫に出土した。49～54は土師器鍋である。49～52は播磨型鍋である。53・54は鉄かぶと形の鍋である。55・56は備前焼播鉢、57は備前焼壺、58は備前焼甕である。SD1-2の最下層(10層)から五輪塔の火輪が出土した。底面で一辺18.5cm、高さ11.6cmを測る。

SE1 石組み井戸である。掘方は直径約3.1mを測り、深さは遺構検出面から2.7mを測る。石組みは河原石を用い、下部は方形を呈するが、上部はやや崩れ南西部分は円形を呈している。井側内からは瀬戸美濃焼天目碗(59)、鉄かぶと形の土師器鍋(60・61)、備前焼播鉢(62～64)が出土した。埋土最上層からは一石五輪塔が出土した。裏込めから構築時期を特定できる遺物の出土はなく、石臼のみ出土した。遺物は時期幅を持つが、64の播鉢から井戸の廃絶は16世紀後半以降に位置づけられる。

柱穴群 調査区の南側でピットを多数検出した。この範囲は江戸時代を通じて町屋1の建物が存在していた場所にあたるため、土坑等の掘削が少なく比較的良好に残存している。しかし、検出したピットから建物を復元することができなかった。ただし、SP7～SP32の並びにみるように概ね江戸時代の町割りと合致すると考えられる。ピットの時期は前述したように、大半は不明であるが、SP61の最下部から図25の播磨型土師器鍋(66)が出土した。他にも同様の細片を伴うピットがあることから、概ねSD1と同時期の所産と判断している。遺物の出土量が少なくこれらの遺構の時期の特定は困難であるが、出土遺物から概ね15世紀後半以降に位置づけられよう。

2-SP47は直径29cm、深さは遺構検出面から15cmを測る。最下部から完形の鉦鼓が出土した。外面を下に向けた状態で水平に置かれ、外面には藁状の物質が付着していた。共伴する遺物がないため時期は不明であるが、埋土は他のピットと類似することから、同一時期と判断している。

鉦鼓は縁部径18.4cm、口径20cm、器高5cmを測る。器表には砂の付着が著しく、現段階では除去しきれしていない。重量は現状で1,461gを測る。鼓面は断面半円形の圏線を縁に沿って一重、その内側に二重に巡らす。中央に一段高い区画を設け、縁部は斜めに外へ張り出す。体部にはヒレ状を呈する耳を2個付ける。口唇部は外方へ拡張し内面端部を内側へ引き出している。端面はやや内傾している。出土した鉦鼓は、水澤氏の分類に従えば内側先端のみが突出するタイプでⅡ期に比定できる(水澤2011)。Ⅱ期の製作年代は14世紀後半と考えられていることから、調査で検出したピットの時期とは年代に開きがあるが、伝世等を考慮すれば上限については矛盾しない。



図18 江戸以前遺構平面図

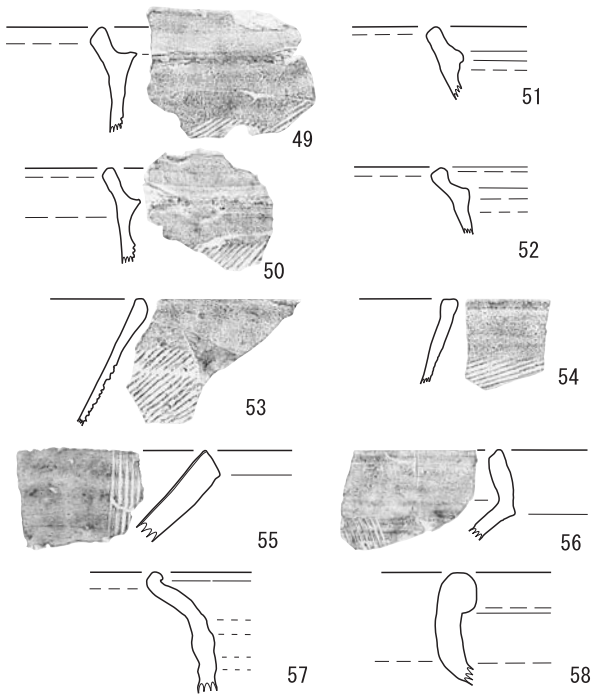


図19 SD1出土遺物

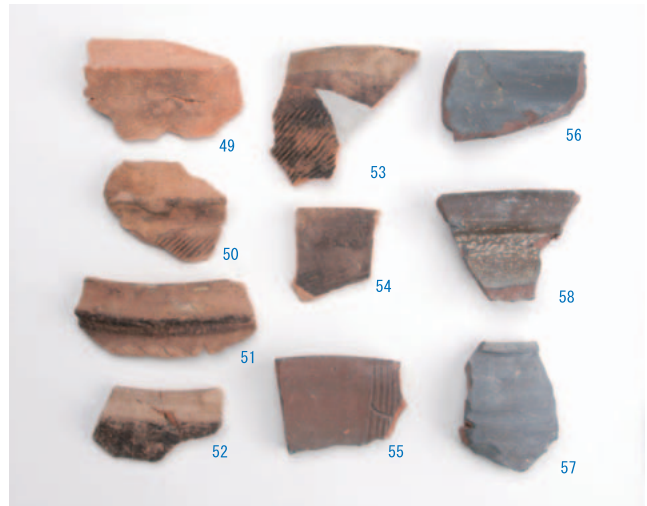
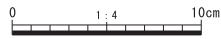


写真41 SD1出土遺物

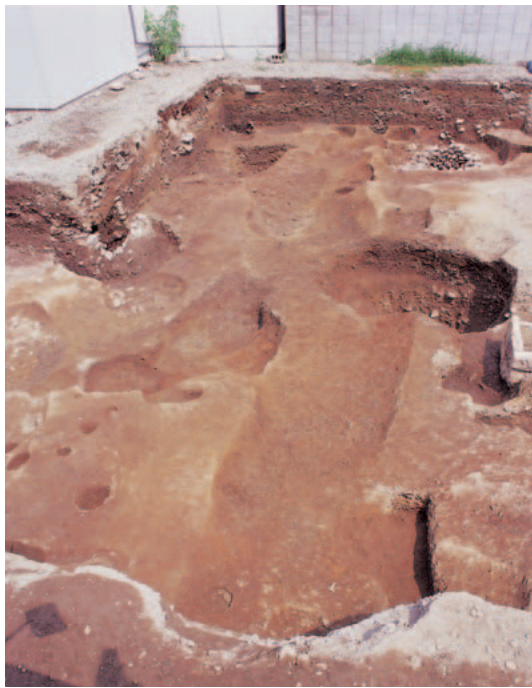


写真39 SD1全景(西から)



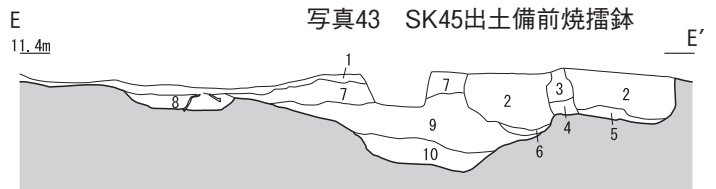
写真40 SD1・2-SK19・2-SK45断面(西から)



写真42 SD1出土火輪



写真43 SK45出土備前焼播鉢



- | | |
|---------------------------|--------------------------|
| 1.2.5Y4/1黄灰色粗砂混じり細砂(炭化物含) | 6.2.5Y4/2暗灰黄色砂(2-SK19) |
| 2.10YR5/1褐灰色礫 | 7.2.5Y5/2暗灰黄色~5/3黄褐色細砂 |
| 3.2.5Y5/2暗灰黄色細砂 | 8.2.5Y5/1黄灰色粗砂(2-SK45) |
| 4.2.5Y4/1黄灰色粗砂(礫含) | 9.2.5Y5/1~4/1黄灰色砂~細砂(礫含) |
| 5.2.5Y4/1黄灰色シルト | 10.2.5Y4/1黄灰色粗砂(礫含) |

図20 SD1・2-SK19・2-SK45断面図





写真44 SE1全景

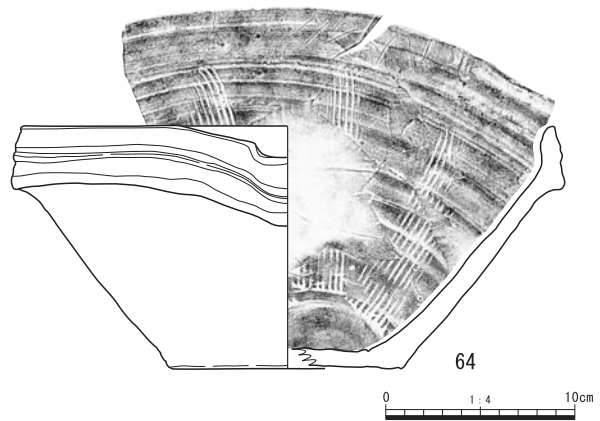
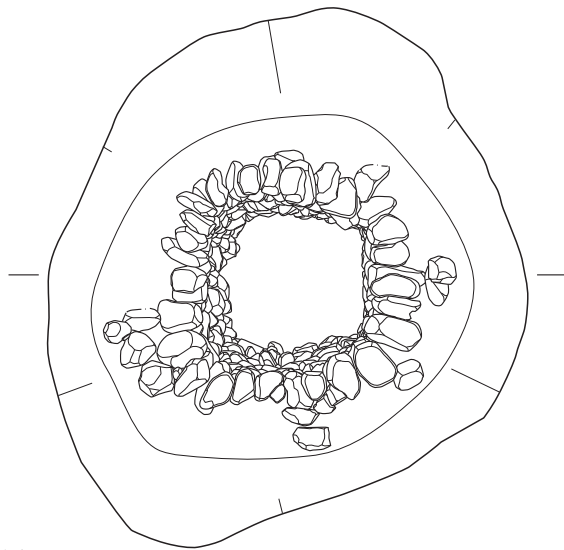
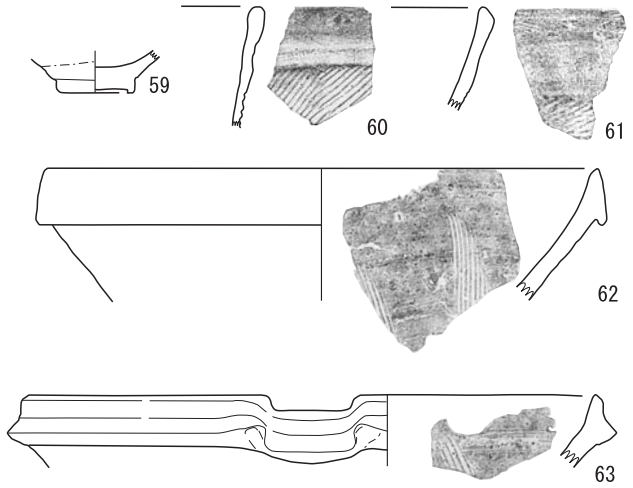


図22 SE1出土遺物

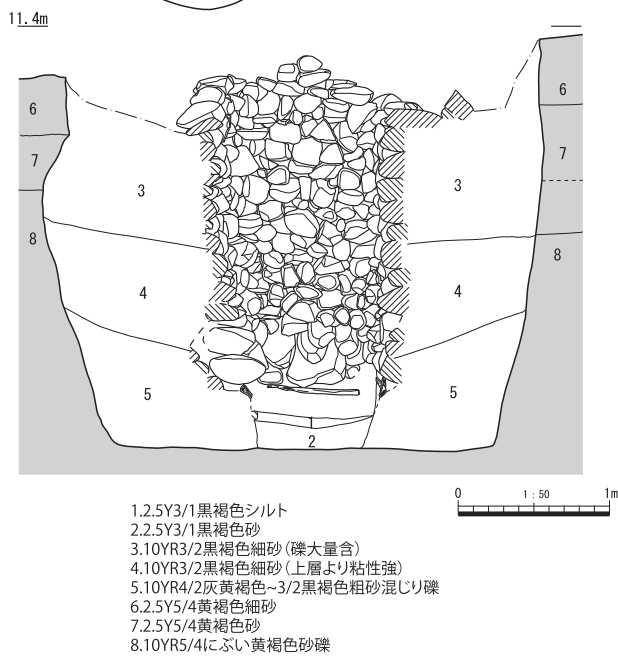


図21 SE1平・断面図



写真45 SE1出土遺物

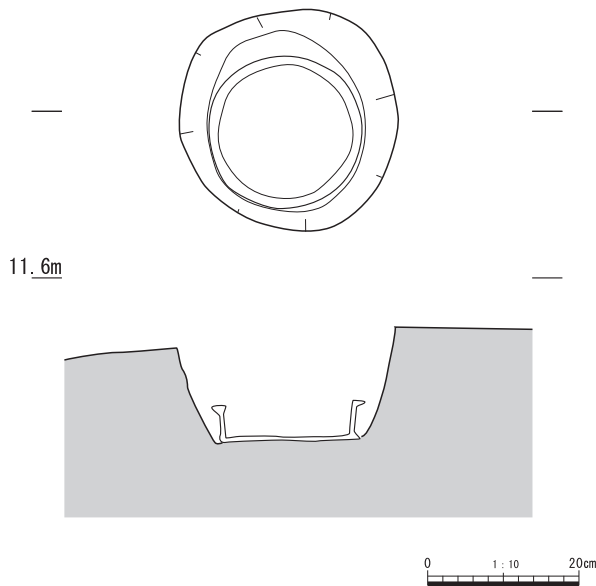


図23 SP47平・断面図

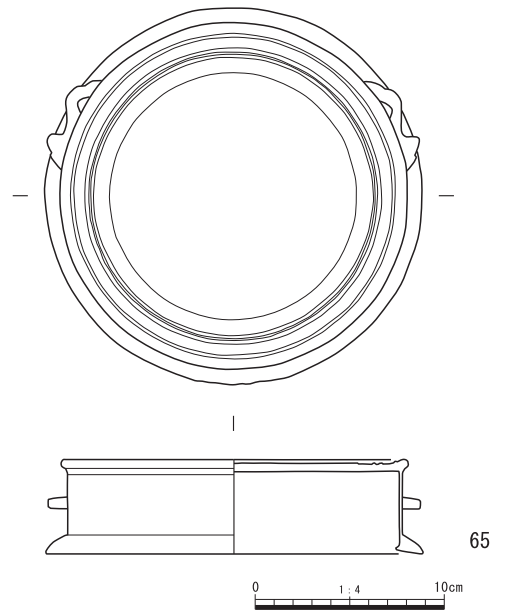


図24 SP47出土鉦



写真46 SP47鉦出土状況



写真47 SP47断割り



写真48 SP47出土鉦



写真49 調査区南側柱穴群



写真50 SP61遺物出土状況

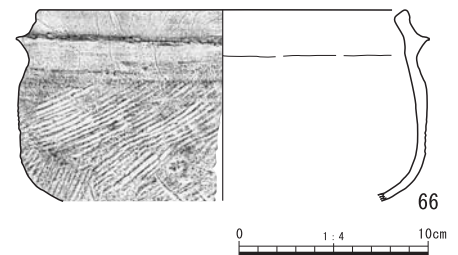


図25 SP61出土土師器塼

第Ⅳ章 総括

今回の調査によって、江戸時代の遺構・遺物、江戸時代以前の遺構・遺物を検出するなど近世姫路城を知る上で大きな成果を得ることができた。以下に江戸時代とそれ以前とで成果をまとめる。

①調査地における江戸時代の町屋

敷地境 調査前の99番1、100番1の敷地境にほぼ合致する位置において、第1面、第2面とも敷地境の遺構を確認した。このことから調査地における敷地境は江戸時代前半から踏襲されている可能性が極めて高いといえる。町屋1の間口は約5間、町屋2は約3間、裏行きはそれぞれ約17間に復元できる。こうした敷地境については、第289次調査において敷地境が杭→素掘り溝→石組みへと同一場所に変遷している例が検出されている（姫路市教委2013）。また、第205次調査では江戸時代後半もしくは近代になって敷地境の位置が動く例も検出されている（姫路市教委2011）。いずれにせよ、姫路城下町における町屋の敷地境の検出例は少ない。これに対して武家屋敷地では明確に遺構として確認できる敷地境の検出例は少ない。街路側溝に接続する石組み溝等がわずかに確認されているが、総じて遺構として把握できる例は少なく、絵図等を参考にして遺構の希薄な部分から復元していくに留まる（姫路市教委2007）。このことは公有地である武家屋敷に比べ、私有地である町屋の方がはっきりした形（遺構として認識しやすい形）での敷地境の明示が必要とされたためと想定される。

空間利用 町屋1は遺構検出状況から江戸時代を通じて、道路に面した建物－水廻り（井戸・漆喰遺構）－奥（土坑・庭等）の配置をとることが確認できた。これは第260次調査で検出された遺構検出状況と類似する。町屋2においても江戸時代前半にはこのパターンであった可能性が高い。その後、江戸時代のある時期から近代まで建て替えを繰り返しながら敷地奥まで建物が立てられる。それに対応するように土坑の掘り込みはあまり認められなくなる。ただし、町屋2に属する1-SE4の位置が町屋1の井戸の検出位置と大きく変わらないことから、総じて空間利用の仕方に大きな変化はなかったと考えることができる。

町屋1の建物の範囲は2-SK15北端附近に想定される。前面道路から約13.5mを測り、1間1.8mで換算すれば裏行き7間半となる。現存町屋遺構から類似の規模を拾えば、平面形式1列3間～4間もしくは2列6間の建屋と推測される（大場1999）。

町屋2は前面道路から調査区北端まで約24mを測る。同じく現存町屋遺構から推測すれば、間口3間の家屋の平面形式は1列3間となる（大場1999）。このことから検出した礎石は間口から連続する建家に伴うものではなく、別棟の可能性が高い。瓦列までは前面道路から約13.5mを測り、町屋1で想定される建物範囲と重なることからその蓋然性は高い。

生業 町屋1で検出した遺構には鍛冶関連遺物が大量に含まれていることから、当地で鍛冶が行われていたことが判明した。時期は2-SK15が17世紀前半、1-SK35が17世紀半ば、2-SK8については2-SK39が下層にあることから17世紀半ば以降に位置づけられる。2-SK1、1-SK32、1-SK38については共伴する遺物が出土していないため時期を特定することができないが、総じて17世紀代でおさまると考える。町屋2においてはこうした鍛冶関連遺物の出土は全く認められない。出土した鉄滓等については金属

学的な分析を行っていないため町屋1で行われた活動の詳細は不明であるが、大鍛冶、小鍛冶とも行われていたと推測される。また、炉跡を含め鍛冶に伴う鉄製品等の出土は確認できなかった。姫路城下町の北東には鍛冶町があり、ここに鍛冶職人が集住していたと予想されるが、武家屋敷と町屋から鍛冶関連遺物が出土する例は少なくない。ただし、武家屋敷も含めて大半の調査では少量の出土に留まる。本例のように大量に確認できたのは第145次調査（本町）、第253次調査（呉服町）、第260次調査（元塩町）である。第145次調査は中堀に面した町屋裏手の土坑内から大量の鍛冶関係遺物が出土している。複雑に土坑が切りあっているため、詳細な時期は不明である（山本1995）。第253次調査では18世紀前半を除く江戸時代を通じて鍛冶が営まれていたことが判明している。また「承応」の年号の記された羽口も出土している（姫路市2011）。第260次調査は図2に示しているように敷地内裏手の土坑内から出土している。時期は江戸時代後半に属す。また、江戸時代の地誌『播磨鑑』には、福中町と背割を挟んだ北側の坂元町は慶長九年の姫路町替の時、刀鍛冶集団を書写坂本から移住させたことによる町名であると記している。こうした調査成果や伝承を踏まえれば鍛冶活動は職町名の鍛冶町のみで行われたのみではなく、城下町の各所で行われていた可能性を指摘できる。ただし、いずれの調査でも金属学的な見地からの分析を行っていないため、今後分析を行い姫路城下町における鍛冶の実態に迫っていく必要がある。

②江戸時代以前の遺構

15世紀後半から16世紀後半の遺構を確認した。調査地である福中町が「福中村」に由来する点については第Ⅱ章第1節で触れたが、調査によってその時期に合致する遺構が検出された意義は大きい。もちろん検出した遺構＝福中村の一部である確証はないが、文献に記載された時期に当地において生活が営まれていたことが今回の調査によって初めて判明した。中でも鉦鼓が完形で出土したことは注目される。共伴遺物がないことから厳密な時期の特定は困難であるが、その形態から14世紀後半に比定できる。また出土時に認められた藁状の植物についても新潟県の「江上館跡」における出土例とも共通している。鉦鼓の性格は一概に仏具とは言えず、いくさにおける叩き鉦、雅楽に用いられる打楽器としての用途等があり、鉦鼓の出土した遺跡は、出土状況等が不明なものを除けば館、寺社、塚、墓等がある（水澤2011）。今回の調査地における可能性としては、塚と墓は除外でき、館、寺社のいずれかとなるだろう。しかし、検出した遺構からは館もしくは寺社とも断定し難いため、両者を含めた範囲で村落出土と位置づけておきたい。

また、建物に復元可能なピットはなかったものの、その並びと3-SD1の方向が現在の町割りに近い点は注目される。福中町附近の江戸時代の町割りは池田氏時代の町割りによる「築城ライン」と考えられている（堀田1988）。今回の調査では建物等の明確な軸線を有す遺構を検出し



写真51 調査地より姫路城を望む（南西から）

ていないため断定はできないが、近世姫路城の町割りに際して、福中町周辺に存在したそれ以前の「村」の軸をある程度踏襲した形で町割りが行われた可能性も浮上してきた。今後の周辺における検出例の増加に期待したい。このように江戸時代以前の遺構については、極めて限定的な確認にとどまったが、実態がほとんど不明である近世姫路城成立以前の状況を知る上で貴重な成果といえる。

引用・参考文献

- 伊藤 幸司 1992 「近世遺構出土垣塙と羽口」『難波宮址の研究 第九』（財）大阪市文化財協会
- 大場 修 1999 「町家と町並み」『姫路市史』第15巻下 姫路市
- 岡田 章一・長谷川 真 2003 「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」『研究紀要』第3号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 小栗栖健治 2013 「播磨国総社の三ツ山大祭と城下町・姫路」『バンカル』No.86 （公財）姫路市文化国際交流財団
- 九州近世陶磁学会事務局 2000 『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
- 中川 猛 2012 「焙烙考—姫路と周辺の焙烙—」『山口大学考古学論集Ⅱ』中村友博先生退官記念論集作成委員会
- 難波 洋三 1992 「徳川氏大坂城期の炮烙」『難波宮址の研究 第九』（財）大阪市文化財協会
- 乗岡 実 2000 「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会
- 橋本 政次 1952 『新訂姫路城史』上・中・下巻 臨川書店
- 長谷川 真 2006 「近世丹波焼の諸相」『江戸時代のやきもの—生産と流通—』（財）瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター
- 備前焼紀年銘土型調査委員会 1998 『備前焼紀年銘土型調査報告書』備前市教育委員会
- 姫路市教育委員会 2007 『特別史跡姫路城跡—学校法人淳心学院整備事業に伴う発掘調査報告書—』姫路市教育委員会
- 2011 『姫路城城下町跡—姫路城跡第254次 南部中堀発掘調査報告書—』姫路市教育委員会
- 2013 『姫路城城下町跡—姫路城跡第289次調査発掘調査報告書—』姫路市教育委員会
- 姫路市史編纂委員会 1986 『姫路市史』第10巻 史料編近世1 姫路市
- 1988 『姫路市史』第14巻 別編姫路城 姫路市
- 1991 『姫路市史』第3巻 本編近世1 姫路市
- 2011 『姫路市史』第9巻 史料編中世2 姫路市
- 堀田 浩之 1988 「築城プランと基準線」『姫路城史』第14巻 別編姫路城 姫路市
- 真鍋 成史 2003 「鍛冶関連遺物」『考古資料大観』第7巻 小学館
- 水澤 幸一 2011 『仏教考古学と地域史研究』高志書院
- 森 恒裕 1991 「淳心学院出土遺物の検討—16世紀後半から17世紀初頭における姫路城下町の様相に関する予察—」『姫路市立城郭研究室年報』Vol.1 姫路市立城郭研究室
- 山本 博利 1995 「姫路城跡・国道2号線 キャブ建設事業（2）」『城郭研究室年報』vol.5 姫路市立城郭研究室

報告書抄録

ふりがな	ひめじょうじょうかまちあと							
書名	姫路城城下町跡							
副書名	姫路城跡第300次発掘調査報告書							
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター 調査報告							
シリーズ番号	第16集							
編著者名	中川 猛							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1 TEL(079)252-3950							
発行機関	姫路市教育委員会							
所在地	〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地 TEL(079)221-2787							
発行年月日	2014年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
ひめじょうじょうかまちあと 姫路城城下町跡	ひょうごけんひめじし 兵庫県姫路市 ふくなまち 福中町99番1・ 100番1	28201	020169	34度 49分 58秒	134度 41分 16秒	2013.7.9 ～ 2013.8.21	273 m ²	建物 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
姫路城城下町跡	城館	中世 江戸時代	井戸、溝、ピット 井戸、礎石、土坑	鉦鼓 近世陶磁器 鍛冶関連遺物				
要約	江戸時代の町屋跡を2軒分調査した。うち一軒においては、17世紀代に鍛冶が行われていたことが確認できた。また、江戸時代の下層において15世紀後半から16世紀後半の遺構を確認した。外曲輪において当該時期の遺構の確認は未だ多いとはいえない状況で、城下町建設以前の様相を知る上で貴重な成果といえる。							

姫路城城下町跡 — 姫路城跡第300次発掘調査報告書 —

平成26年(2014年)3月31日 発行

編集 姫路市埋蔵文化財センター 〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL(079)252-3950

発行 姫路市教育委員会 〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地
TEL(079)221-2787

印刷・製本 丸山印刷株式会社 〒676-8566 兵庫県高砂市神爪1丁目11番33号